

Contents

演劇芸術監督 小川絵梨子	2
2025/2026シーズン 演劇 ラインアップ	4
日韓国交正常化60周年記念公演 焼肉ドラゴン	5
鼻血 -The Nosebleed-	8
スリー・キングダムス Three Kingdoms	11
ガールズ&ボーイズ	14
フルオーディション8 エンドゲーム	17
ノゾエ征爾 新作	20
11の物語-短編・中編(仮)	23
こつこつプロジェクト -ディベロップメント-	25
ギャラリープロジェクト	26
公演一覧(1997.10~2025.7)	27

2025/2026 シーズン 演劇

演劇芸術監督 小川絵梨子



シーズンの幕開けにお送りするのは、2025 年の日韓国交正常化 60 周年記念公演となる『焼肉ドラゴン』です。本作は 08 年に新国立劇場で初演され、11 年、16 年と再演を重ね、今回で 4 度目の上演となります。舞台は 1970 年、「人類の進歩と調和」をテーマに大阪万博が開催された時代です。その後、半世紀を経たいま、再び万博が開催される中で、世の中の、あるいは人々の何が変わり、何が変わっていないのか。本作は我々の現在とそこから見据える未来を問いかけます。本公演は日韓合同公演として、韓国の芸術の殿堂（ソウル・アーツ・センター）でも上演されます。またギャラリープロジェクトとして日韓演劇交流センターとの共催で韓国の若手劇作家による戯曲のリーディング公演、シンポジウムも開催いたします。

11 月には招聘公演『鼻血-The Nosebleed-』をお送りします。日本をルーツに持ち、米国のニューヨーク・ブルックリンを拠点に活躍されるアヤ・オガワさんがご自身の歴史をもとに描いた作品です。長いディベロップ期間を経て 2017 年に初演、23 年にはオビー賞を受賞しました。「失敗」という旅路を辿り、その先に見出される他者と自己への赦しを主題とした本作は、一人の個の物語でありながらも、現代という時代を生きる者に普遍的に響く、私たち一人ひとりの物語でもあります。

12 月には、サイモン・スティーヴンス作『スリー・キングダムス Three Kingdoms』の日本初演をお届けいたします。サスペンスの形をとりながら、現代社会におけるタブーや資本主義の闇、さらには、目に映る世界の背後に表裏一体で存在する影の世界、現代社会の深層を描く物語です。次期芸術監督である上村聡史さんが演出を務めます。

26 年 4 月には、『ガールズ&ボーイズ』を上演いたします。本作は、ある一人の女性が人生の喜びと喪失、そして壮絶な痛みを語る一人芝居であり、この主人公の視点から崩壊する世界と社会の歪みが浮き彫りになっていきます。20 年に上演を予定していながらコロナ禍で中止となった本作が、今回新たなチームにより実現する運びとなりました。演出には稲葉賀恵さんをお迎えします。

続いて 5 月にはサミュエル・ベケット作『エンドゲーム』をフルオーディションで上演いたします。実存主義文学に分類される本作は、人間存在への根源的な問いを反映しています。人生の意味は何か、すべての不条理の中で我々はどう生き続ける意志を見出すのか。一見すると世界の終わりを描いた陰鬱な世界観ながらも、実は“終わらないためにどう生きるか”を問い直す物語でもあります。

6 月にはノゾエ征爾さんによる新作戯曲をお届けいたします。演出には、この度新国立劇場に初めての登場となる金澤菜乃英さんをお迎えいたします。本作は、4 月、5 月の公演とともに、孤立や断絶、そして断片化が進む世界の中で、それでもなお「生きる意味を見出し続けること」をテーマにしたシリーズとなる予定です。

シーズンの最後にお届けするのは、『11 の物語-短編・中編（仮）』となります。新作戯曲を含む日本や世界のさまざまな短編・中編戯曲を集め上演いたします。子供から大人まで、また初めて演劇を観る方から深い造詣を持つ方まで、幅広い観客の皆様に演劇の多彩な楽しさ、豊かさをお届けいた

します。

最後になりましたが、本シーズンを持ちまして、二期8年間の任期を満了し、新国立劇場の演劇芸術監督を退任いたします。これまで本劇場での創作に関わってくださった全ての皆さま、そして何より、劇場に足を運び、作品を共にしてくださった観客の皆さま、劇場の試みを応援してくださった皆さまに心から感謝申し上げます。新たな時代へと歩みを進める新国立劇場演劇部門の未来に、引き続きご期待いただけますと幸いです。8年間、本当にありがとうございました。

〈プロフィール〉

2004年、ニューヨーク・アクターズスタジオ大学院演出部卒業。06～07年、平成17年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修生。18年9月より新国立劇場の演劇芸術監督。

近年の演出作品に『ART』『おやすみ、お母さん』『管理人／THE CARETAKER』『ダウト～疑いについての寓話』『検察側の証人』『ほんとうのハウンド警部』『死と乙女』『熱帯樹』『出口なし』『FUN HOME』『死の舞踏／令嬢ジュリー』『RED』など。新国立劇場では『ピローマン』『デカログ』『レオポルトシュタット』『アンチボデス』『キネマの天地』『タージマハルの衛兵』『骨と十字架』『スカイライト』『1984』『マリアの首-幻に長崎を想う曲-』『星ノ数ホド』『OPUS／作品』の演出のほか、『東京ローズ』『かもめ』『ウィンズロウ・ボーイ』の翻訳も手掛けた。

Drama

2025/2026 シーズン 演劇 ラインアップ 〈計 7 演目〉

2025 年 10 月

日韓国交正常化60周年記念公演

日韓合同公演

焼肉ドラゴン

作・演出: 鄭 義信

2025 年 11 月

海外招聘公演

鼻血 -The Nosebleed-

作・演出: アヤ・オガワ

字幕翻訳: 広田敦郎

2025 年 12 月

日本初演

スリー・キングダムス Three Kingdoms

作: サイモン・スティーヴンス

翻訳: 小田島創志

演出: 上村聡史

2026 年 4 月

日本初演

ガールズ & ボーイズ

作: デニス・ケリー

翻訳: 小田島創志

演出: 稲葉賀恵

2026 年 5 月

フルオーデション8

エンドゲーム

作: サミュエル・ベケット

翻訳: 岡室美奈子

演出: 小川絵梨子

2026 年 6 月

新作

ノゾエ征爾 新作

作: ノゾエ征爾

演出: 金澤菜乃英

2026 年 7 月

11の物語-短編・中編(仮)

演出: 鶴山 仁、大澤 遊、小山ゆうな、須貝 英、鈴木アツト、西沢栄治、

宮田慶子、山田由梨、小川絵梨子ほか

日韓国交正常化60周年記念公演

2025年10月
＜日韓合同公演＞

焼肉ドラゴン

Yakiniku Dragon

小劇場 〈日本語・韓国語上演／日本語字幕付〉

●会員先行販売期間：2025 年 7/26(土)～8/4(月)

●一般発売日：2025 年 8/10(日)

作・演出：鄭 義信

Written and Directed by CHONG Wishing

出演：千葉哲也、村川絵梨、智順、櫻井章喜、朴 勝哲、崔 在哲、石原由宇、北野秀気、松永玲子

イ・ヨンソク、コスヒ、パク・スヨン、キム・ムンシク ほか

Cast：CHIBA Tetsuya, MURAKAWA Eri, Chisun, SAKURAI Akiyoshi, PARK Seungcheol, CHOI Jaechol,

ISHIHARA Yu, KITANO Hideki, MATSUNAGA Reiko

LEE Young Suck, KOH Soo Hee, PARK Su Young, KIM Mun Sik and others

作品

2025年に日韓国交正常化60周年を迎えることを記念し、鄭 義信が日本の影の戦後史を描いた日韓合同公演『焼肉ドラゴン』を上演いたします。

『焼肉ドラゴン』は、2008年に芸術の殿堂（ソウル・アーツ・センター）とのコラボレーション企画として、鄭 義信が新国立劇場に書き下ろし、制作されました。02年、05年上演の『その河をこえて、五月』（平田オリザ・金 明和作、李 炳焄／平田オリザ演出）に続き、二度目の芸術の殿堂とのコラボレーション企画です。

万博に沸く1970年前後の関西の地方都市に暮らす在日コリアン一家と、彼らが営む焼肉屋に集う人々を生き生きと描いた本作は、2008年の初演時、初日が開幕するとあっという間に評判が口コミで広がり、東京・ソウル公演では、毎回スタンディング・オベーションとなる熱狂的な支持を受け、この年の日韓両国の演劇賞を多数受賞。また18年には鄭 義信が自らメガホンを取り、映画化もされました。日韓の過去、現在、未来を、音楽入り芝居でおかしく、そして哀しく切なく描いたこの物語が、08年、11年、16年に続き、25年四度目の上演を果たします。

1970年の大阪万博のテーマ「人類の進歩と調和」——55年前、未来へと託されたこの願いは、果たして今、実現したといえるのでしょうか？ 奇しくも2025年は大阪・関西万博開催の年でもあります。鄭 義信が掲げる“記録する演劇”『焼肉ドラゴン』を通して、過去と向き合い、未来を見つめていきたいと思えます。

なお、本作は25年11月に芸術の殿堂にて韓国公演を予定しております。

物語

万国博覧会が催された1970（昭和45）年、関西地方都市。高度経済成長に浮かれる時代の片隅で、焼肉屋「焼肉ドラゴン」の赤提灯が今夜も灯る。

店主・金 龍吉は、太平洋戦争で左腕を失ったが、それを苦にするふうでもなく淡々と生きている。

家族は、先妻との間にもうけた二人の娘・静花と梨花、後妻・英順とその連れ子・美花、そして、英順との間に授かった一人息子の時生……。ちょっとちぐはぐな家族と、滑稽な客たちで、今夜も「焼肉ドラゴン」は賑々しい。ささいなことで泣いたり、いがみあったり、笑いあったり……。

そんな中、「焼肉ドラゴン」にも、しだいに時代の波が押し寄せてくる。



作・演出家からのメッセージ

鄭 義信

『焼肉ドラゴン』の 2008 年の初演から 17 年……まるで、昨日のことにように思えますが、ずいぶん年月は流れていたんですね。自分でも驚きです。

その間に、初演で信吉を演じた朱源実さんが亡くなり、韓国公演を見に来た僕の父と母も亡くなりました。

時の流れは早く、なにもかも忘却の彼方に流れていって、とても大事なことでさえ、思い出せないことも多々あります。けれど、初演の初日の温かい拍手は、今も耳に残っています。

今回、四度目の上演となりますが、初演と変わることなく、また新しい家族と新しく物語を紡いでいこうと思っています。

どうか、変わることのない温かい拍手で、新しい家族を迎えていただければ、これほどの喜びはありません。

日韓の有り様も、目まぐるしく変わっていますが、変わることのない日韓の俳優たちの熱い思いが、観客の皆様胸に届くことを願っています。そして、きっと届くと信じています。

スタッフ プロフィール

鄭 義信

CHONG Wishing

1993年に『ザ・寺山』で第38回岸田國士戯曲賞を受賞。映画にも進出して、同年『月はどっちに出ている』の脚本で、毎日映画コンクール脚本賞、キネマ旬報脚本賞などを受賞。98年には、『愛を乞うひと』でキネマ旬報脚本賞、日本アカデミー賞最優秀脚本賞、第一回菊島隆三賞、アジア太平洋映画祭最優秀脚本賞など数々の賞を受賞した。さらに平成13年度芸術祭賞大賞を受賞したドラマ「僕はあした十八になる」(2001・NHK)などテレビ・ラジオのシナリオでも活躍する一方、エッセイ集「アンドレアスの帽子」なども出版。2018年には自ら初監督を担い、『焼肉ドラゴン』を映画化した。

現在も、文学座、こんにゃく座ほかに戯曲を提供する傍ら、21年に浅草九劇をホームグラウンドとした新劇団ヒトハダを旗揚げ。近年では23年にポン・ジュノ監督の世界的ヒット映画「パラサイト 半地下の家族」を舞台化。24年は『杏仁豆腐のココロ』『旅芸人の記録』『男たちの挽歌』(脚本・演出)『欲望という名の電車』(演出)を手がける。新国立劇場では、『たとえば野に咲く花のように』『アジア温泉』の作、『焼肉ドラゴン』『パーマ屋スマレ』『赤道の下のマクベス』の作・演出を務め、初演の『焼肉ドラゴン』で、第16回読売演劇大賞優秀演出家賞、第12回鶴屋南北戯曲賞、第43回紀伊國屋演劇賞、第59回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

また、日本から韓国への招聘公演だけでなく、10年『赤道の下のマクベス』、14年『歌うシャイロック』『ベニスの商人』を音楽劇に翻案、15年『コーカサスの白墨の輪』(唱劇形式に翻案)など、韓国芸術団体への書下ろしも多数ある。



2025年11月
＜海外招聘公演＞

鼻血-The Nosebleed-

The Nosebleed

小劇場 〈英語上演／日本語字幕付〉

●会員先行販売期間：2025 年 8/30(土)～9/8(月)

●一般発売日：2025 年 9/14(日)

作・演出：アヤ・オガワ

Written & Directed by Aya OGAWA

字幕翻訳：広田敦郎

Japanese Surtitle by HIROTA Atsuro

出演：ドレイ・キャンベル、アシル・リー、クリス・マンリー、アヤ・オガワ、塚田さおり、カイリー・Y・ターナー

Cast : Drae CAMPBELL, Ashil LEE, Chris MANLEY, Aya OGAWA, Saori TSUKADA, Kaili Y. TURNER

作品

2022 年上演のフランス・オデオン劇場『ガラスの動物園』、2025 年上演予定のチェコ・ブルノ国立劇場『母』に続く、海外招聘公演として、米国の劇作家、演出家、パフォーマーであるアヤ・オガワの作・演出による『鼻血 -The Nosebleed-』を上演いたします。

本作は 2017 年より長いディベロップメント期間を経て 21 年秋にニューヨークのジャパン・ソサエティにてワールドプレミアを迎え、22 年夏にはリンカーン・センター・シアター内のクレア・トウ・シアター、23 年 4 月にはワシントン D.C.のウーリー・マンモス・シアター、そして 24 年 1 月から 2 月にかけて、ミネアポリス、ロサンゼルス、コロンバスの 3 都市を回る米国ツアーを実施。23 年にはオフブロードウェイなどで上演された優れた舞台に与えられるオビー賞を受賞しました。

「失敗」をテーマに生まれた『鼻血 -The Nosebleed-』は、劇作家・演出家、アヤ・オガワの自伝的な戯曲であり、亡くなった父親との複雑な関係を描いています。波乱万丈で不条理かつユーモアに満ちた一連のエピソードを通して、オガワは自分と父親との間に横たわる、文化や世代間のギャップ、そして同時に親として子どもと直面する問題を明らかにしていきます。この滑稽で、優しく、独創的な作品は、「自分がやったこと、やらなかったことで間違っていたこと、後悔していること」がどのように受け継がれ、(次の世代に)伝わっていくのか、そして赦しを得るために何が必要なのかを問いかけていきます。

物語

作家のアヤに紹介された 4 人の俳優がそれぞれの「失敗談」を語る。やがて彼らはそれぞれ「アヤ」を演じながら観客に問い始める。

『バチェラー』という恋愛リアリティ番組を見たことがありますか？

番組で描かれる男性とその父親の難しい関係。その関係にまつわる「失敗」がアヤ自身の親として、そして子どもとしての失敗を思い出させる。面白おかしく、ほろ苦い失敗の数々。しかし、一番大きな失敗は、父親が亡くなった時にお葬式もあげなかったこと。

次々に観客へ投げかけられる問いを通して紐解かれていくのはアヤと、無口で冷たい昭和の父親との相いれなかった親子関係。亡くなってしまった父との関係はこのまま「失敗」としてアヤの中に残り続けるだけなのか……

作・演出家からのメッセージ

アヤ・オガワ

Though I was born in Japan to Japanese parents, from an early age I felt like a fraud. After spending my toddlerhood in the American South, I attended an American elementary school in Japan, so I felt estranged from my neighbors. Later growing up in California as an adolescent I constantly felt that gaping crevasse between myself and what an “American” looked and acted like. Over the decades I made different kinds of peace with myself around where I fit in the world, but those answers are slippery, never fixed, and always elusive. The experience of the immigrant is a fraught story that plays out over generations. That delicate balance felt very fragile especially after Trump was elected president in 2016, and now, again in 2024. That such a hateful man who breed xenophobia and homophobia would be chosen as the leader of the U.S. was and is affront to the communities I belong to, and in many ways, a failure. This play evolved from an exploration of the “failure” and what that means to us, culturally, societally, individually. It is about facing our own difficult failures and finding the compassion to forgive oneself and others. I do hope that Japanese audiences find a resonance with this work.

わたしは日本で、日本人の両親のもとに生まれたにもかかわらず、幼い頃から自分が偽物のように思えてなりませんでした。幼少期をアメリカ南部で過ごし、日本に戻ってからはアメリカンスクールに通っていたため、周囲の人々に溶け込めない感覚を覚えました。その後、思春期をカリフォルニアで過ごしながら、自分自身と「アメリカ人らしい」外見や振る舞いとの間に、大きな隔たりがあるのを常に感じていました。何十年もの間、世界のどこにいれば自分らしくいられるのか、様々な形で折り合いをつけようとしてきましたが、その答えはつかみどころがなく、不確かで、捕らえたと思った瞬間にいつもすりりと消えてしまうのでした。「移民」という経験は、どれほど世代を重ねても、大きな不安と隣り合わせに語られます。この微妙なバランスは、特に 2016 年、そしてこの 2024 年、再びトランプ氏が大統領に選出された際、非常にもろく感じられました。根深いヘイトにより外国人排斥や同性愛差別を助長する男性がアメリカのリーダーに選ばれたことは、いまもなお、わたしが身を置くコミュニティに対する侮辱であり、多くの面で失敗と言えます。このお芝居は、その「失敗」の探求から生まれました——それがわたしたちの文化、社会、そしてわたしたち個人にとって何を意味するのか。描いたのは、わたしたち自身の困難な失敗に向き合い、思いやりを見つけ、それによって自分や他者を赦すことです。きっと日本の観客の皆さんにも共鳴していただける作品だと思っています。（訳：広田敦郎）

スタッフ プロフィール

アヤ・オガワ

Aya OGAWA

東京生まれ。現在は米国・ブルックリンを拠点に活動する劇作家、演出家、翻訳家。多様な視点や世界各地の形式・影響を取り入れ、アメリカの伝統的なアイデンティティや美意識に挑戦すると同時に、アメリカ現代演劇の国際化やアジアとアメリカのアーティスト交流を促進している。代表作には本作『鼻血-The Nosebleed-』のほか、『Journey to the Ocean』（Foundry Theater）、『oph3lia』（HERE Arts Center）などがある。また、ハルナ・リー作でオビー賞受賞作でもある『Suicide Forest』の演出も担当。翻訳家としても、日本の現代戯曲を英訳する活動を行っており、岡田利規（チェルフィッチュ主宰）などの作品を手掛けている。日本劇作家協会の新作シリーズ英訳日本語劇選考委員。2023年にはヘレン・メルリ戯曲賞、リンカーン・センター・シアターからは2022-2023年 Cullman賞など、多くの賞や助成を受ける。また、New Dramatistsのレジデント劇作家であり、MacDowell フェローでもある。



広田敦郎

HIROTA Atsuro

劇団四季、TPTを経て、フリーランスの戯曲翻訳者。2009年、トム・ストッパード作『コースト・オブ・ユートピア』の翻訳で小田島雄志翻訳戯曲賞。2013年、アジア・カルチュラル・カウンシル（ACC）グランティ。近年の翻訳上演作に、キャリル・チャーチル作『A Number - 数』、『What If If Only - もしもしせめて』、サイモン・ステューヴンス作『広い世界のほとりに』、『FORTUNE』、ローレン・ガンダーソン作『Silent Sky』、チェーホフ作『三人姉妹』、『桜の園』（サイモン・ステューヴンス版）、アーサー・ミラー作『橋からの眺め』、『みんな我が子』、『セールスマンの死』、テネシー・ウィリアムズ作『地獄のオルフェウス』、『西洋能 男が死ぬ日』、ダグラス・マックスウェル作『OUR BAD MAGNET』、ダイアナ・ソン作『STOP KISS』、アレクシ・ケイ・キャンベル作『The Pride』、アンドリュー・ボヴェル作『これだけはわかっている』、カレル・チャペック作『母』。新国立劇場での翻訳に『レオポルトシュタット』、『母』（日本語字幕）、『ザ・ヒューマンズー人間たち』。



2025年12月
＜日本初演＞
Japan Premiere

スリー・キングダムス Three Kingdoms

Three Kingdoms

中劇場

●会員先行販売期間：2025 年 9/27(土)～10/6(月)

●一般発売日：2025 年 10/12(日)

作：サイモン・スティーヴンス

Written by Simon STEPHENS

翻訳：小田島創志

Translated by ODASHIMA Soshi

演出：上村聡史

Directed by KAMIMURA Satoshi

作品

作者、サイモン・スティーヴンスはまさにイギリス演劇界の奇才と呼べる劇作家で、その作品は上演のたびに話題となり、賛否両論を呼ぶ問題作を数多く生み出してきました。二度の、オリヴィエ賞の受賞もその証左であり、最近では、チェーホフやブレヒトといった古典の翻訳、アダプテーションにも挑戦しています。

日本初演となる、この『スリー・キングダムス Three Kingdoms』もイギリス初演時には、劇評界を二分する賛否となり、大きな話題となりました。演出の上村聡史は過去に二回、彼の戯曲を手掛け、作品が投げかける同時代性に大いに共感しており、今回の上演でも上村の手腕が存分に発揮されることでしょう。

物語

刑事のイグネシウスは、テムズ川に浮かんだ他殺体の捜査を開始する。捜査を進めるうちに、被害者はいかげわしいビデオに出演していたロシア語圏出身の女性であることが判明する。さらに、その犯行が、イツ・ア・ビューティフル・デイの名曲『ホワイト・バード』と同名の組織によるものであることを突きとめる。イグネシウスは捜査のため、同僚のチャーリーとともに、ホワイト・バードが潜伏していると思われるドイツ、ハンブルクへと渡る。

ハンブルクで、現地の刑事ステファンの協力のもと捜査を始める二人だったが、イグネシウスがかつてドイツに留学していた頃の不幸事を調べ上げていたステファンにより、事態は思わぬ方向に進んでいくのであった。

翻訳家からのメッセージ

小田島創志

サイモン・ステイーヴンスの戯曲では、自分の領域を離れた登場人物が「移動」する過程でどのような心理状態に陥るかが、作品を解釈するポイントとなりやすい。2007年初演の『ボルノグラフィ』では、同時テロ事件が勃発したロンドンを舞台に、様々な人物が異なる地へと移動する。彼等はまた「一線を越える」という意味でも「移動」している。15年初演の一人芝居『ソング・フロム・ファー・アウェイ』でも、弟の死の知らせをきっかけにニューヨークからオランダへ帰国した主人公が、アムステルダム街なかを歩く描写が含まれている。さらに、同年上演の『ハイゼンベルク』では、自己の人間関係や生活、過去という「領域」から離れた登場人物が、お互いに向かって歩み寄る。

物理的・精神的に「移動」することが、登場人物に変化をもたらす—その意味では本作『スリー・キングダムス Three Kingdoms』もまた、サイモンらしいと言えばサイモンらしい。ただしこの作品は、いくつもの顔を持っている。イギリス、ドイツ、エストニアを舞台としたサスペンス・ミステリーの装いを見せつつも、性の商品化と資本主義のまやかしに切り込み、人間の内奥に潜む闇や偏見が炙り出される。ひとつの視座では網羅しきれない多面体のような作品であり、あらゆる定義をすり抜けていく。

演出の上村さんをはじめとしたスタッフ・キャストの皆様と、稽古場でこの作品に向き合う日々が待ち遠しい。翻訳という作業では、どんな作品に関しても、選び取る言葉一つで、醸し出す色合いが大きく変化してしまう。この作品では特に、その責任を感じる。いったい正解はどこにあるのか—この作品が照射する現代社会の様相に目を向けつつ、演劇の迷宮に迷い込む醍醐味を味わう日々が続く。

演出家からのメッセージ

上村聡史

2012年にイギリス、ドイツ、エストニアで初演された『スリー・キングダムス』。イギリスの劇評では、新聞記者たちが酷評、オンライン批評家たちが絶賛と、評価を二分し、話題となりました。現代イギリス演劇の名手、サイモン・ステイーヴンスの本作は、デイヴィッド・リンチ監督の映画「インランド・エンパイア」から影響を受けていることもあり、挑戦的で難解。ゆえに英国の主流から評価されないのも頷けますが、今までの現代演劇の作劇を更新するかのような表現方法や、氏が得意とする詩情性と、氏の作品としては珍しいグローバルズムへの批評性が垣間見える作品となっています。

顔のない死体が発見された事件から端を発し、資本主義の国から旧共産主義の国へと真相を捜査するこの物語は、悪夢へと導かれるように、消費社会のカオス、暴力の精神性と脆弱性、性的人身売買、旧共産主義国との分断などが垣間見えてきます。そして、ホラー・サスペンスのような様相を呈し、行きつく先は、私たちが抱える“喪失感”へと辿り着きます。いくつものメタファーが散りばめられた、このサイモン・ステイーヴンスの冒険を、中劇場という広大な空間に、大胆に表現することで、現代人が抱える虚無感を、「闇のなかに存在する星」のように、演出していければと思います。

スタッフ プロフィール

サイモン・スティーヴンス

Simon STEPHENS

1971年、イギリス・マンチェスター出身。2005年『On the Shore of the Wide World (広い世界のほとりに)』でオリヴィエ賞新作演劇賞受賞。以降『ハーパー・リーガン』『ポルノグラフィ』『Punk Rock』『Birdland』など多数。近年では、12年に再度オリヴィエ賞を受賞した、マーク・ハッドンの小説の舞台化『夜中に犬に起こった奇妙な事件』（15年、トニー賞受賞）やチェーホフ『桜の園』『かもめ』、一人芝居に翻案した『ワーニャ』、プレヒト『三文オペラ』の脚色も手掛ける。15年、二人芝居『ハイゼンベルク』はオフ・ブロードウェイで上演されロングランされた。他には『彼方からのうた』（共作）『FORTUNE』など。

小田島創志

ODASHIMA Soshi

1991年生まれ。武蔵大学、共立女子大学ほか非常勤講師。演劇雑誌「悲劇喜劇」編集協力。専門はハロルド・ピンター、トム・ストッパードを中心とした現代イギリス演劇。これまでの翻訳作品に『ドクターズジレンマ』『BIRTHDAY』『ULSTER AMERICAN』『プレイキング・ザ・コード』『ラビット・ホール』『聖なる炎』『管理人／THE CARETAKER』『HEISENBERG (ハイゼンベルク)』『ポルノグラフィ』『受取人不明 ADDRESS UNKNOWN』など。一川華との共訳作品に『ケイン&アベル』。ミュージカルの翻訳・訳詞作品に『スライス・オブ・サタデーナイト』『回転木馬』。新国立劇場では、『白衛軍 The White Guard』『エンジェルス・イン・アメリカ』『アンチポデス』『タージマハルの衛兵』を翻訳。



上村聡史

KAMIMURA Satoshi

2006年文学座座員となり、18年に同劇団を退座。24年9月より新国立劇場演劇芸術参与。09年より文化庁新進芸術家海外留学制度において1年間イギリス・ドイツに留学。第22回・第29回読売演劇大賞最優秀演出家賞、第17回千田是也賞、第56回紀伊國屋演劇賞を受賞。近年の主な演出作品に、『夜は昼の母』『My Boy Jack』『野鴨-Vildanden-』『ガラスの動物園』『森 フォレ』『Oslo (オスロ)』など。新国立劇場では、『白衛軍 The White Guard』『デカログ』『エンジェルス・イン・アメリカ』『斬られの仙太』『オレスティア』『城塞』『アルトナの幽閉者』を演出。



ガールズ & ボイズ

2026年4月
＜日本初演＞
Japan Premiere

Girls & Boys
小劇場

●会員先行販売期間：2026 年 1/24(土)～2/2(月)
●一般発売日：2026 年 2/11(水・祝)

作：デニス・ケリー

Written by Dennis KELLY

翻訳：小田島創志

Translated by ODASHIMA Soshi

演出：稲葉賀恵

Directed by INABA Kae

作品

2018年にロンドン、ロイヤルコート劇場にて、キャリー・マリガン出演によって初演されたデニス・ケリーの傑作です。初演時には多くの絶賛を浴び、その後、ブロードウェイでも上演されました。

ある女性の視点から、愛、結婚と仕事、出会いや喪失を描く一人芝居。順調に見えていた主人公の人生が崩壊していく予想外の物語の中で、現代社会における様々な歪が描かれる本作は本邦初演となります。

物語

人生、どうしたらいいのか分からない—— 一人旅に出た「わたし」はイタリアの空港で偶然一人の男性に出会い、恋に落ち、結婚する。仕事も順調、二人の子供にも恵まれ、一家は幸せに満ちた日々を送るが、些細なことがきっかけで幸せなはずの生活は突然崩れ始める。そして事態は予期せぬ方向へと進み始め……。

翻訳家からのメッセージ

小田島創志

計り知れない出来事が起こったときに、どうすれば「心」を守ることができるのか—『ガールズ&ボーイズ』では、言葉一つ一つに、喜怒哀楽の豊かな一人の人間が息づいている。過去を語るその人は、振り返りながら楽しくなって笑っているのかもしれないし、悲しいからこそ明るさを装っているのかもしれない。目の前で語るその人は、いったいどんな心を抱えているのか。心が傷つく、立ち直るということは、外から見ている他人が決めつけるものではない。しかし他人の状態に思いを馳せ、想像する努力を投げ出してはいけない。『ガールズ&ボーイズ』は、その努力を続けなさいと、そっと後押ししてくれる。

作者のデニス・ケリーは、心を揺るがす「暴力」についてこれまでも取り組んできた。たとえば2005年初演の『Osama the Hero』では偏見や歪んだ正義感が生む暴力を、09年初演の『Orphans』では人種間の憎悪と暴力の連鎖を描いている。今回上演される『ガールズ&ボーイズ』もまた、暴力の根源に目を向けさせる。「男」という「性」そのものが原因なのか、それとも社会が性についての固定概念を練り上げ、暴力的行為を生み出すのか。もしくは、ジェンダーの他に原因があるのか。18年にイギリスで『ガールズ&ボーイズ』が初演されて以後も、男性が起こした数々の事件が明らかになっており、この作品を今上演する意義はますます高まっている。

演出家からのメッセージ

稲葉賀恵

劇場の外ではもはや演劇で起こる以上の悲惨で信じられないことが、日々無数に起きています。同時に胸躍る幸福なことも起きています。多くはそれほど悲惨でも幸福でもない、名前もつけられずに忘れられていく出来事かもしれません。

漠然とした言い方ですが、私は子供の時から街を歩く人全員にそのような人生があり、それを全て知ることなく、今出会った瞬間から風景として忘れていくことが恐怖でした。生まれて死ぬことに意味なんてないことが恐ろしかった。

そんな時、劇場と出会いました。

この物語はある女性の物語です。彼女は言います。

「1つ、これはあなたたちに起こった話じゃない。2つ、今起こっている話じゃない」

でも劇場では様々な人がそれぞれの人生の瞬間で、ある物語を媒介にして忘れていた記憶を思い出したり共鳴したりします。そして自分ごとのように想像し、泣き、笑います。

幼い私にとってそれはまるで人生のシェルターのような場所でした。

私に恐怖があることを立ち止まって認めることが許される、救いのような。

とりとめのないお話になってしまいましたが、そんな作品を創れたらいいと思います。

スタッフ プロフィール

デニス・ケリー

Dennis KELLY

イギリスの劇作家。1970年生まれ。2003年『Debris』（2000年執筆）で劇作家デビュー。05年『Osama the Hero』をハムステッド・シアターに書き下ろし、その後同劇場と緊密な関係を結ぶ。10年にロイヤル・シェイクスピア・カンパニー委嘱『Matilda the Musical』（ロアルド・ダール原作『マチルダは小さな大天才』）を上演、オリヴィエ賞、トニー賞の最優秀ミュージカル賞を受賞。ナショナル・シアターやドンマー・ウェアハウスなどにも作品を書き下ろす。他には映画『Black Sea』、BBCテレビなどにも脚本を執筆している。

小田島創志

ODASHIMA Soshi

※13ページを参照



稲葉賀恵

INABA Kae

日本大学藝術学部映画学科卒。2008年文学座附属演劇研究所入所。13年に座員となる。同年4月『十字軍』にて文学座初演出。これまでの主な演出作品に、『オレアナ』『リタの教育』、ミュージカル『ラフヘスト〜残されたもの』、音楽劇『不思議な国のエロス』〜アリストパネス「女の平和」より〜、『クレバス 2020』『プレイキング・ザ・コード』『幽霊はここにいる』『加担者』『母 MATKA』『墓場なき死者』『熱海殺人事件』『野鴨』など。23年、『加担者』『幽霊はここにいる』の演出で第30回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。新国立劇場では、『私の一ヶ月』『誤解』を演出。



2026年5月
＜フルオーディション8＞

エンドゲーム

Endgame
小劇場

●会員先行販売期間：2026年3/7(土)～3/16(月)
●一般発売日：2026年3/20(金・祝)

作：サミュエル・ベケット

Written by Samuel BECKETT

翻訳：岡室美奈子

Translated by OKAMURO Minako

演出：小川絵梨子

Directed by OGAWA Eriko

作品

毎シーズンに一本、全キャストをオーディションで選考、上演する演目の第8弾として、サミュエル・ベケットの名作『エンドゲーム』を上演します。「終焉」の時を待つ二人の登場人物を軸に、人間とは、生きるとは、と問う本作。そこに確かに在ったものたちが少しずつ姿を消していく中、彼らの先に残るものは？

作り手が新しい俳優と、俳優が新しい演出家と、劇場が新しい作り手たちと出会い、作品を立ち上げていく、小川絵梨子が芸術監督として柱の一つに掲げる企画です。

演出は、小川絵梨子芸術監督自らが担い、2025年3月に公募期間を設け、4月から5月にかけてオーディションを行います。

物語

家具のない室内。舞台奥に小さな窓が二つ。カーテンは閉じている。壁際にはバケツが二つ、並んで置いてある。古ぼけたシーツを被って車椅子にかけている盲目のハム。もうひとり、クロヴが不自由な足取りで室内をウロついている。どうやら主従関係のようだ。二人はとりとめのない会話を続け、ハムは常にクロヴに文句を言い、怒鳴り散らし、イライラしている。クロヴはたまに外を覗いたりもするのだが、見えるのは殺伐とした風景。お互い、そんな日常に絶望しうんざりしていた。やがて退屈しのぎにハムが、バケツの中の人間に話しかける。中にいたのは彼の父親らしい。そしてもうひとは……。

翻訳家からのメッセージ

岡室美奈子

自粛生活を余儀なくされた COVID-19パンデミックを経て、ウクライナやガザなど世界のいたるところで戦争が起こっている現在、『エンドゲーム』はとてつもなくリアルな作品です。もともと『ゴドーを待ちながら』などベケットの演劇は戦争や災害が起こった土地で上演されてきましたが、『エンドゲーム』は『ゴドー』以上に現在の世界に応答しているように思われます。また、戦争や厄災のみならず介護やヤングケアラーの問題にも直結しています。しかしそうした諸問題を映し出すだけではなく、人間の連帯と孤独、物語の役割など普遍的なテーマをもった深い作品でもあります。

新訳では、盲目のハムの語りを大事にし、会話パートと語りのパートの文体を変える工夫をしました。ベケットと言えば、不条理劇＝わけがわからないというイメージが根強くありますが、そうした固定観念を払拭すべく、原文に忠実で、かつ、わかりやすい訳を心がけました。ハムとクロヴの二人の関係の変化がお客様に伝わることを願っています。最後にクロヴがどういう決断をしたのか、想像していただければ幸いです。

演出家からのメッセージ

小川絵梨子

サミュエル・ベケットによる『エンドゲーム』は、1957年に初演されました。描かれている世界は、どうやら『ゴドーを待ちながら』の時代よりもさらに荒廃が進んでおり、人間関係は一層の悪化を見せ、今まさに終わろうとしている世界に見えます。しかし描いているのは「意味を失った世界」や「世界の終わり」という状況だけでなく、「終わらないためにどう生きるか」を探究する物語でもあると思います。ベケット作品の登場人物たちのように、時間と存在への無力感と対峙しながらも、それでもなお生きることを意味を模索し続ける姿は、科学技術が進み世界がより密接になろうとも変わらず、普遍的な人間そのものの姿です。ベケット自身、この『エンドゲーム』を「自分の作品の中で最も嫌いじゃない作品」と評したとされています。また、私が特に心に残っているベケットの言葉に「Try again. Fail again. Fail better.」というものがあります。冷徹に見える現実の中に人間的な温もりが宿っているベケットの考え方に希望を感じます。失敗を繰り返し、終わりに近づく中にあって「どう終わりを迎えるか」あるいは「どうやって終わらせないか」という問いを絶えず問い続けること。この作品を通じて、生きる意義を「問い続ける姿勢」こそが人間の希望であることを描ければと考えております。

スタッフ プロフィール

サミュエル・ベケット

Samuel BECKETT

1906年4月13日-1989年12月22日。アイルランド出身の劇作家、小説家。27年、ダブリンのトリニティ・カレッジを首席で卒業。28年にパリ高等師範学校に英語講師として赴任し、ジェイムズ・ジョイスと知り合う。ダブリンやロンドンでの生活を経て、37年の終わりにパリに正式に移住し、マルセル・デュシャンと出会う。ナチス占領下には、英国特殊作戦執行部の一員としてレジスタンス運動に参加。『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけえぬもの』の小説三部作を手がけるかたわら、52年には『ゴドーを待ちながら』を刊行（53年に初演）。ヌーヴォー・ロマンの先駆者、アンチ・テアトルの旗手として活躍し、69年にノーベル文学賞を受賞。ポストモダンな孤独とブラックユーモアを追究しつづけ、70年代にはポール・オースターとも交流。晩年まで、ミニマル・ミュージックさながらの書法で、ラジオ・テレビドラマなど数多くを執筆。

岡室美奈子

OKAMURO Minako

早稲田大学文学学術院教授、早稲田大学演劇博物館前館長。文学博士。専門は現代演劇論、テレビドラマ論、サミュエル・ベケット論。著書に『テレビドラマは時代を映す』（ハヤカワ新書）、共編著書『サミュエル・ベケット！——新しい批評』（水声社）、『ベケットを見る八つの方法：批評のボーダレス』（水声社）、『ベケット大全』（白水社）、Borderless Beckett / Beckett sans frontières, Samuel Beckett Today / Aujourd'hui 19 (Rodopi)、Ireland on Stage: Beckett and After (Carysfort Press)など、訳書に『新訳ベケット戯曲全集1 ゴドーを待ちながら／エンドゲーム』（白水社）など、共訳書に『ベケット伝』（白水社）などがある。



小川絵梨子

OGAWA Eriko

※3 ページを参照



ノゾエ征爾 新作

2026年6月
＜新作＞
A New Play

A New Play by NOZOE Seiji
小劇場

●会員先行販売期間：2026 年 3/28(土)～4/6(月)
●一般発売日：2026 年 4/12(日)

作：ノゾエ征爾
演出：金澤菜乃英

Written by NOZOE Seiji
Directed by KANAZAWA Nanae

作 品

たとえば乗り越えるのが不可能に見える大きな壁が自分の前に立ちはだかった時に感じる孤独。たとえば自分の弱さを吐露することに躊躇いを覚えること。たとえば他者との断絶感。現代人が抱える痛みや一人では心の問題を、「recover」や「cure」といった言葉をキーワードに、ノゾエ征爾の誠実な筆致で描く新作を、青年座の気鋭の演出家、金澤菜乃英を迎え、お届けします。

作家からのメッセージ

ノゾエ征爾

真にタフな人なんて、そうそういないと思っています。

しかし、この土地に立つには、それなりのタフさが必要ですし、タフに乗り越えなくてはならない場面が多発します。

タフになれるよう鍛錬し、タフな人に憧れます。

人生を重ねるほどに、この「タフ地」の過酷さを痛感するばかりです。

凸凹タフ地のあちこちで、人々が足をくじいています。

数ミリの段差でも、捻挫する時はするのです。

軽い捻挫に見えても、本人は深刻だったりもするし、

他者に、その捻挫の本当の程度を知ることはできません。

でも捻挫って、ちょっと言いづらい。

「どうしたの?」「捻挫しました。」ちょっとダサいし、恥ずかしい。

なるべく捻挫をひた隠して、平然と歩いて見せたい。

それが、この「タフ地」ではカッコいいとされているから。

そういう私は、捻挫イストです。

完治しないまま、捻挫に捻挫を重ねているように感じます。

自分を含めた、捻挫してばかりの人々に思いを巡らせて書きたいと思います。

つまり、足に湿布まみれの人々のお話です。

湿布の匂いが、心地よく受け入れてもらえる社会になったらいいのにな。

演出家からのメッセージ

金澤菜乃英

私の夢で、目標でもある……新国立劇場での演出！とても有難い機会を頂き光栄です。小川絵梨子さんから2026 シーズンの企画意図やテーマを伺い、メンタルヘルスは自分にとって関心が深い題材なこと、そしてノゾエ征爾さんの書き下ろしはどんな世界観になっていくのか……これからの創作が楽しみです！

演出デビューからこの10年間、人生の岐路に立つ大きな変化が多々ありました。東京の下町から豪雪地帯へ移住して二児の母になり……市井の人々との関わりによって自身の人生をふくよかにしていくことが、私の創作に欠かせない要素となっています。今作はこれまでの集大成として全力で取り組んで参ります！

スタッフ プロフィール

ノゾエ征爾

NOZOE Seiji

脚本家・演出家・俳優。劇団「はえぎわ」主宰。1999年に「はえぎわ」を始動し、以降、全公演の作・演出を手掛ける。2012年『〇〇トアル風景』で第56回岸田國士戯曲賞を受賞。劇団外の近年の主な舞台作品に、世田谷パブリックシアター『ロボット』（潤色・演出）、モチロンプロデュース『ボクの穴、彼の穴。W』（翻案・脚本・演出）、彩の国さいたま芸術劇場「音楽劇『死んだかいぞく』（脚本・演出）など。新国立劇場では『ピーター&ザ・スターキャッチャー』『ご臨終』の演出を手掛けたほか、『デカローグ』（プログラムA）に出演。



金澤菜乃英

KANAZAWA Nanae

東京都出身、越後妻有在住。2010年多摩美術大学映像演劇学科卒業後、青年座研究所入所。12年劇団青年座文芸部入団。演出部や演出助手を経て、15年『二人だけのお葬式～かの子と一平～』（作/吉永仁郎）で演出家デビュー。16年『天一坊十六番』（作/矢代静一）で青年座本公演初演出。最近の演出作品に『東京ストーリー』（作/松田正隆）、『時をちぎれ』（作/土田英生）、『諸国を遍歴する二人の騎士の物語』（作/別役実）〔以上、青年座〕、その他に『ミュージカルおれたちは天使じゃない』『イツフォーリーズ』、『イエルマ』〔劇団昴ザ・サード・ステージ〕など。



2026年7月

11の物語-短編・中編(仮)

11 Stories—One Act Anthology
小劇場

●会員先行販売期間：2026 年 5/2(土)～5/11(月)

●一般発売日：2026 年 5/23(土)

演出：鶴山 仁、大澤 遊、小山ゆうな、須貝 英、鈴木アツト、西沢栄治、宮田慶子、山田由梨、小川絵梨子ほか

Directed by UYAMA Hitoshi, OSAWA Yu, KOYAMA Yuna, SUGAI Ei, SUZUKI Atsuto, NISHIZAWA Eiji,
MIYATA Keiko, YAMADA Yuri, OGAWA Eriko and others

作 品

「より多くのお客様に劇場に足を運んでいただき、出来る限り気楽に演劇に触れて欲しい」との願いから、2020 / 2021シーズンに企画していた新国立劇場短編フェスティバル。残念ながらコロナ禍で、上演を延期していた本企画を、装いを新たに、改めて企画、上演いたします。

短編（最短20分程度～最長45分程度）、中編（60分程度）の作品を集め、期間中、お客様には、様々な作品を体験していただきたいと考えています。

作品は11作品を予定、古今東西、古典から現代劇まで、幅広いジャンルの作品を取り上げ、多くの幅広い世代の演出家に参加をしていただく予定です。演劇研修所とも連携をはかる演目や、新国立劇場のシェイクスピアシリーズの新作リーディング公演も行います。

Drama

プロジェクト

こつこつプロジェクト —ディベロップメント—

ギャラリープロジェクト

こつこつプロジェクト —ディベロップメント—

KOTSUKOTSU Project —Development—

概要

「作り手が通常の一か月の稽古ではできないことを試し、作り、壊して、また作る場にしたい。」という小川芸術監督の意を受け、一年間を通して作品を育てていくプロジェクト。具体的には、3～4か月ごとに試演を実施し、その都度、演出家と芸術監督、制作スタッフが協議を重ね、上演作品がどの方向に育っていくのか、またその方向性が妥当なのか、そしてその先の展望にどのような可能性が待っているのかを見極めていきます。時間に追われない稽古のなかで、作り手の全員が問題意識を共有し、作品への理解を深めることで、舞台芸術の奥深い豊かさを一人でも多くの観客の方々に伝えられる公演となることを目標とします。

第一期参加作品からは、『あーぶくたった、にいたった』（西沢栄治演出）を2021 / 2022シーズンに上演いたしました。そして第二期参加作品からは、24年11月に『テーバイ』（船岩祐太構成・上演台本・演出）を上演。

24年7月からスタートした第三期では、栗原 崇、鈴木アツト、そして第二期から続投となる柳沼昭徳の三人の演出家が参加し、現在25年8月までディベロップメントを続けていきます。また、柳沼昭徳が演出を手掛ける『夜の道づれ』は、25年4月にこつこつプロジェクトStudio公演として上演いたします。

第一期（2019年3月～2020年3月）

『スペインの戯曲』	作：ヤスミナ・レザ 翻訳：穴澤万里子	演出：大澤 遊
『リチャード三世』	作：ウィリアム・シェイクスピア	構成・演出：西 悟志
『あーぶくたった、にいたった』	作：別役 実	演出：西沢栄治

第二期（2021年4月～2022年2月）

『7ストーリーズ』	作：モーリス・パニッチ	翻訳・演出：福山桜子
『テーバイ』	原作：ソポクレス (『オイディプス王』『コロノスのオイディプス』『アンティゴネ』より)	構成・上演台本・演出：船岩祐太
『夜の道づれ』	作：三好十郎	演出：柳沼昭徳

第三期（2024年7月～2025年8月）

<参加演出家>

栗原 崇	鈴木アツト	柳沼昭徳
------	-------	------

ギャラリープロジェクト

GALLERY Project

概要

ーギャラリープロジェクトとは？

新国立劇場では演劇芸術監督 小川絵梨子の方針の下、演劇の作り手の方々との交流を深め積極的に連携して、幅広い観客層に演劇をお届けしたいと思っています。そのために、一般の方々に向けてのワークショップや講演などを実施しており、その一環としての演劇イベントが「ギャラリープロジェクト」です。

舞台という豊かな世界を、一人でも多くの皆様に楽しんでいただければ幸いです。

それぞれの詳細は、随時ウェブなどで発信します。

○トークセッション

〈演劇のおしごと〉

演劇に携わるクリエイターや団体との「横の繋がり」を広げ、その仕事に迫るトークセッション。

毎回様々なジャンルからゲストを迎え、進行役の小川絵梨子芸術監督と普段なかなか知ることができない仕事について掘り下げていきます。

〈演劇嘶（えんげきばなし）〉

毎回様々なゲストを迎えて、演劇に関する「あんな話、こんな話」を語っていただくシリーズ企画です。

ゲストと一緒に舞台の面白さ、奥深さを探っていきます。

○ワークショップ

中高生を対象に、日本の演劇界の第一線で活躍するスタッフ、クリエイター、俳優の特別講義やワークショップを行っています。

○公演ガイドツアー

公演中の劇場にて、公演スタッフが舞台美術の説明や開幕に至るまでの足跡等を解説いたします。

Drama

公演一覧

開場記念公演～2024/2025 シーズン

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
開場記念公演	★紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子	1997. 10/22
	[蒲田行進曲完結編]銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	1997. 11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	1997. 12/04
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	1998. 1/17
1998/ 1999	★虹を渡る女	岩松 了		岩松 了	1998. 5/07
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	1998. 5/12
	★今宵かぎりは… 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内銃一郎		栗山民也	1998. 6/12
	★音楽劇 ブッダ	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	1998. 9/07
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック「二十日鼠と人間」 より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	1998. 10/03
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	1998. 10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	1998. 10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	1998. 11/04
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	1998. 12/02
	★新・雨月物語		脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	1999. 1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴／酒井 誠／高瀬精一郎		1999. 2/03
	セツアンの善人	ベルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	1999. 5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	1999. 6/04
	棋人 一チーレン	過 士行	菱沼彬晃	林 兆華	1999. 7/01
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	1999. 10/04
	美しきものの伝説		宮本 研	木村光一	1999. 11/04
	—森本薫の世界—				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	1999. 12/08
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	2000. 1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	2000. 2/09
	★新・地獄変	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	2000. 3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	2000. 4/11
2000/ 2001	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2000. 5/11
	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恆存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	2000. 9/08
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2000. 10/02
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	2000. 10/20
	シリーズ「時代と記憶」				
	★memorandum メモランダム	構想・構成 ダムタイプ			2000. 11/27
	★母たちの国へ	松田正隆		西川信廣	2001. 1/10
	★ピカドン・キジムナー	坂手洋二		栗山民也	2001. 2/10
	★こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2001. 3/12
	★夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2001. 5/08
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	2001. 4/04
	贋作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	2001. 6/01

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレヌ・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアヌ・ムヌーシュキン	2001. 9/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	2001. 10/29
	★美女で野獣	荻野アンナ		宮田慶子	2001. 12/10
	シリーズ チェーホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チェーホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	2002. 1/11
	Vol.2 くしゃみ／the Sneeze	アントン・チェーホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	2002. 2/28
	Vol.3 ★「三人姉妹」を追放されし トウゼンバフの物語	岩松 了		岩松 了	2002. 4/01
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チェーホフ	小野理子	栗山民也	2002. 5/09
	Vol.5 櫻の園	アントン・チェーホフ	潤色 堀越 真(神西清翻訳による)	栗山民也	2002. 6/21
2002/ 2003	★その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	2002. 6/03
	海外招待作品 Vol.2 国際チェーホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	2002. 9/07
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2002. 10/11
	★ノヤジルシ 一誘われて	太田省吾		太田省吾	2002. 11/12
	シリーズ「現在へ、日本の劇」				
	①ピルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	2003. 1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	2003. 2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	2003. 4/08
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	2003. 5/26
2003/ 2004	★涙の谷、銀河の丘	松田正隆		栗山民也	2003. 5/13
	★ゴロヴリョフ家の人々	原作 サルティコフ・シチエドリ 脚本 永井 愛	翻訳 湯浅芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	2003. 6/18
	★nocturne 一月下の歩行者	構成 松本雄吉		松本雄吉	2003. 9/08
	★夢の泪	井上ひさし		栗山民也	2003. 10/09
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	2003. 11/27
	シリーズ「女と男の風景」				
	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game /ザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇 『椅子』より 翻案 ジム・チム／ オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／ オリヴィア・ヤン	2004. 2/20
	② ★THE OTHER SIDE ／線のむこう側	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫 振策	2004. 4/12
	③★てのひらのこびと		鈴江俊郎	松本祐子	2004. 5/11
	④請願 一静かな叫びー	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	2004. 6/22
	こんにちは、母さん	永井 愛		永井 愛	2004. 3/10
	透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	2004. 3/17
	ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラバイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2004. 6/09

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2004/ 2005	THE LOFT 小空間からの提案				
	胎内	三好十郎		栗山民也	2004. 10/04
	◎ ★ヒトノカケラ	篠原久美子		宮崎真子	2004. 10/22
	★二人の女兵士の物語	坂手洋二		坂手洋二	2004. 11/08
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2004. 11/16
	★城	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	2005. 1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	2005. 3/14
	②★コミュニケーションズ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆		構成・演出 渡辺えり子	2005. 4/08
	③★箱根強羅ホテル	井上ひさし		栗山民也	2005. 5/19
2005/ 2006	④うら騒ぎ ノイズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	2005. 6/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	2005. 5/13
	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトゥロ・ウイの興隆	ベルトルト・ブレヒト	イヤホンガイド翻訳 新野守広	ハイナー・ミュラー	2005. 6/22
	◎黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	2005. 9/27
	◎屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	2005. 10/31
	母・肝っ玉とその子供たち ー三十年戦争年代記	ベルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	2005. 11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	2006. 2/09
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	2006. 3/07
	シリーズ「われわれは、どこへいくのか」				
	①★カエル	過 士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	2006. 4/01
2006/ 2007	◎ ②★マテリアル・ママ		岩松 了	岩松 了	2006. 4/19
	③★やわらかい服を着て	永井 愛		永井 愛	2006. 5/22
	④★夢の痂	井上ひさし		栗山民也	2006. 6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作詞・作曲 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	2006. 5/19
	★アジアの女	長塚圭史		長塚圭史	2006. 9/28
	「劇的な情念をめぐって」ー世界の名作よりー				
	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	2006. 11/02
	イワーノフ／ オイディプス王	原作 アントン・チェホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	2006. 11/04
	◎ ★エンジョイ	岡田利規		岡田利規	2006. 12/07
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	2007. 3/01
2007	★CLEANSKINS /きれいな肌	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	2007. 4/18
	★下周村 一花に嵐のたとえもあるさー	平田オリザ／李 六乙		李 六乙／平田オリザ	2007. 5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアー	2007. 5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	2007. 6/18

★＝新作 ◎＝THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2007/ 2008	「三つの悲劇」ーギリシャから				
	Vol.1 ★アルゴス坂の白い家 ークリュタイムストラー	川村 毅		鶴山 仁	2007. 9/20
	Vol.2 ★たとえば野に咲く花のように ーアンドロマケー	鄭 義信		鈴木裕美	2007. 10/17
	Vol.3 ★異人の唄 ーアンティゴネー	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	2007. 11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	2008. 2/26
	★焼肉ドラゴン	鄭 義信		梁 正雄／鄭 義信	2008. 4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	2008. 5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 ★鳥瞰図 ーちようかんずー	早船 聡		松本祐子	2008. 6/11
	Vol.2 ★混じりあうこと、消えること	前田司郎		白井 晃	2008. 6/27
	Vol.3 ★まほろば	蓬萊竜太		栗山民也	2008. 7/14
2008/ 2009	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎〈綾の鼓〉 深津篤史〈弱法師〉	2008. 9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴオーダン	2008. 10/23
	舞台は夢 ーイリュージョン・コミックー	ピエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	2008. 12/03
	シリーズ・同時代【海外編】				
	Vol.1 昔の女	ローラント・シンメルブフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	2009. 3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティー	翻訳 浦辺千鶴／ 小田島恒志	田村孝裕	2009. 4/10
	Vol.3 タトゥー	デーア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	2009. 5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	2009. 5/29
	★現代能楽集 鶴	坂手洋二		鶴山 仁	2009. 7/02
2009/ 2010	ヘンリー六世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
	第一部 百年戦争				2009. 10/27
	第二部 敗北と混乱				2009. 10/28
	第三部 薔薇戦争				2009. 10/29
	象	別役 実		深津篤史	2010. 3/05
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				2010. 4/04
	夢の泪				2010. 5/06
	夢の痲かさぶた				2010. 6/03
	★エネミイ	蓬萊竜太		鈴木裕美	2010. 7/01
	[JAPAN MEETS... ー現代劇の系譜をひもとくー]				
2010/ 2011	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス ／長島 確	宮田慶子	2010. 9/17
	II やけたトタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	2010. 11/09
	III わが町	ソートン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2011. 1/13
	IV ゴドーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森 新太郎	2011. 4/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	2011. 2/07
	鳥瞰図 ーちようかんずー	早船 聡		松本祐子	2011. 5/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	2011. 6/09
	★おどくみ	青木 豪		宮田慶子	2011. 6/27

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2011/ 2012	【美×劇】 —滅びゆくものに託した美意識—				
	I 朱雀家の滅亡	三島由紀夫		宮田慶子	2011. 9/20
	II ★イロアセル	倉持 裕		鶴山 仁	2011. 10/18
	III 天守物語	泉 鏡花		白井 晃	2011. 11/05
	★パーマ屋スミレ	鄭 義信		鄭 義信	2012. 3/05
	まぼろば	蓬萊竜太		栗山民也	2012. 4/02
	負傷者 16 人 —SIXTEEN WOUNDED—	エリウム・クライエム	翻訳 常田景子	宮田慶子	2012. 4/23
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	V サロメ	オスカー・ワイルド	翻訳 平野啓一郎	宮本亜門	2012. 5/31
2012/ 2013	VI 温室	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	深津篤史	2012. 6/26
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2012. 10/03
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	VII りつぽ	アーサー・ミラー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	2012. 10/29
	★音のいない世界で	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2012. 12/23
	長い墓標の列	福田善之		宮田慶子	2013. 3/07
	With —つながらる演劇—				
	★ウェールズ編『効率学のススメ』	アラン・ハリス	翻訳 長島 確	ジョン・E・マグラ	2013. 4/09
	★韓国編 アジア温泉	鄭 義信	翻訳 朴 賢淑	孫 振策	2013. 5/10
2013/ 2014	★ドイツ編 つく、きえる	ローラント・シンメルプフェニヒ	翻訳 大塚 直	宮田慶子	2013. 6/04
	象	別役 実		深津篤史	2013. 7/02
	Try・Angle —三人の演出家の視点—				
	Vol.1 OPUS / 作品	マイケル・ホリンガー	翻訳 平川大作	小川絵梨子	2013. 9/10
	Vol.2 エドワード二世	クリストファー・マーロウ	翻訳 河合祥一郎	森 新太郎	2013. 10/08
	Vol.3 アルトナの幽閉者	ジャン＝ポール・サルトル	翻訳 岩切正一郎	上村聡史	2014. 2/19
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	VIII ビグマリオン	ジョージ・バーナード・ショー	翻訳 小田島恒志	宮田慶子	2013. 11/13
	マニラ瑞穂記	秋元松代		栗山民也	2014. 4/03
2014/ 2015	テンペスト	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	白井 晃	2014. 5/15
	★十九歳のジェイコブ	原作 中上健次	脚本 松井 周	松本雄吉	2014. 6/11
	永遠の一瞬 —Time Stands Still —	ドナルド・マーグリーズ	翻訳 常田景子	宮田慶子	2014. 7/08
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	IX 三文オペラ	ベルトルト・ブレヒト	翻訳 谷川道子	宮田慶子	2014. 9/10
	二人芝居 —対話するカー—				
	Vol.1 プレス・オブ・ライフ～女の肖像～	デイヴィッド・ヘア	翻訳 鶴澤麻由子	蓬萊竜太	2014. 10/08
	Vol.2 ご臨終	モーリス・パニッチ	翻訳 吉原豊司	ノゾエ征爾	2014. 11/05
	Vol.3 星ノ数ホド	ニック・ペイン	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2014. 12/03
2015	ウィンズロウ・ボーイ	テレンス・ラティガン	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2015. 4/09
	【JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—】				
	X 海の夫人	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス ／長島 確	宮田慶子	2015. 5/13
	東海道四谷怪談	鶴屋南北	上演台本 フジノサツコ	森 新太郎	2015. 6/10
	★かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2015. 7/06

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2015/ 2016	パッション	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェームス・ラパイン	翻訳 浦辺千鶴 訳詞 竜 真知子	宮田慶子	2015. 10/16
	桜の園	アントン・チェーホフ	翻訳 神西 清	鶴山 仁	2015. 11/11
	バグダッド動物園のベンガルタイガー	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 平川大作	中津留章仁	2015. 12/08
	鄭義信 三部作				
	焼肉ドラゴン	鄭 義信		鄭 義信	2016. 3/07
	たとえば野に咲く花のように	鄭 義信		鈴木裕美	2016. 4/06
	パーマ屋スマレ	鄭 義信		鄭 義信	2016. 5/17
	あわれ彼女は娼婦	ジョン・フォード	翻訳 小田島雄志	栗山民也	2016. 6/08
	★「かぐや姫伝説」より月・こうこう・風・そうそう	別役 実		宮田慶子	2016. 7/13
2016/ 2017	フリック	アニー・ベイカー	翻訳 平川大作	マキノノゾミ	2016. 10/13
	ヘンリー四世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
	第一部 -混沌-				2016. 11/26
	第二部 -戴冠-				2016. 11/27
	かさなる視点 ―日本戯曲のカー				
	Vol.1 白蟻の巣	三島由紀夫		谷 賢一	2017. 3/02
	Vol.2 城塞	安部公房		上村聡史	2017. 4/13
	Vol.3 マリアの首 -幻に長崎を想う曲-	田中千禾夫		小川絵梨子	2017. 5/10
	[JAPAN MEETS... ―現代劇の系譜をひもとく―]				
2017/ 2018	XI 君が人生の時	ウィリアム・サローヤン	翻訳 浦辺千鶴	宮田慶子	2017. 6/13
	XII 怒りをこめてふり返れ	ジョン・オズボーン	翻訳 水谷八也	千葉哲也	2017. 7/12
	トロイ戦争は起こらない	ジャン・ジロドゥ	翻訳 岩切正一郎	栗山民也	2017. 10/05
	プライムたちの夜	ジョーダン・ハリソン	翻訳 常田景子	宮田慶子	2017. 11/07
	かがみのかなたはたなかのなかに	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2017. 12/05
	赤道の下のマクベス	鄭 義信		鄭 義信	2018. 3/06
	1984	原作 ジョージ・オーウェル	脚本 ロバート・アイク ／ダンカン・マクミラン 翻訳 平川大作	小川絵梨子	2018. 4/12
	ヘンリー五世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2018. 5/17
	夢の裂け目	井上ひさし		栗山民也	2018. 6/04
2018/ 2019	★消えていくなら朝	蓬萊竜太		宮田慶子	2018. 7/12
	誤解	アルベール・カミュ	翻訳 岩切正一郎	稲葉賀恵	2018. 10/04
	誰もいない国	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	寺十 吾	2018. 11/08
	スカイライト	デイヴィッド・ヘア	翻訳 浦辺千鶴	小川絵梨子	2018. 12/06
	フルオーデション1				
	かもめ	作 アントン・チェーホフ 台本 トム・ストッパード	翻訳 小川絵梨子	鈴木裕美	2019. 4/11
	★少年王者館 1001	天野天街		天野天街	2019. 5/14
	オレスティア	原作 アイスキュロス 作 ロバート・アイク	翻訳 平川大作	上村聡史	2019. 6/06
	★骨と十字架	野木萌葱		小川絵梨子	2019. 7/11
	こつこつプロジェクト -ディベロップメント-				
	リーディング公演				
	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	西 悟志	2019. 3/13
	あーぶくたった、にいたった	別役 実		西沢栄治	2019. 3/14
	スペインの戯曲	ヤスミナ・レザ	翻訳 穴澤万里子	大澤 遊	2019. 3/15

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2019/ 2020	ことぜんシリーズ				
	Vol.1 どん底	マクシム・ゴーリキー	翻訳 安達紀子	五戸真理枝	2019. 10/03
	Vol.2 あの出来事	デイヴィッド・グレッグ	翻訳 谷岡健彦	瀬戸山美咲	2019. 11/13
	Vol.3 タージマハルの衛兵	ラジヴ・ジョセフ	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2019. 12/07
	フルオーデション 2				
	反応工程(公演中止)	宮本 研		千葉哲也	
	ガールズ&ボーイズ(公演中止)	デニス・ケリー	翻訳 小田島創志	蓬萊竜太	
	願いがかなうぐつぐつカクテル	ミヒヤエル・エンデ	翻訳 高橋文子	小山ゆうな	2020. 7/09
2020/ 2021	★イヌビト ～犬人～	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	2020. 8/05
	ガラスの動物園(公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
	リチャード二世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	2020. 10/02
	ピーター&ザ・スターキャッチャー	作 リック・エリス 原作 デイヴ・バリ、 リドリー・ピアスン	翻訳 小宮山智津子	ノゾエ征爾	2020. 12/10
	人を思うちから				
	フルオーデション3 其の壱 斬られの仙太	三好十郎		上村聡史	2021. 4/06
	★其の貳 東京ゴッドファーザーズ	原作 今 敏 上演台本 土屋理敬		藤田俊太郎	2021. 5/12
	其の参 キネマの天地	井上ひさし		小川絵梨子	2021. 6/10
2021/ 2022	フルオーデション 2				
	反応工程	宮本 研		千葉哲也	2021. 7/12
	ガラスの動物園(公演中止)	テネシー・ウィリアムズ		イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	
	フルオーデション 4				
	イロアセル	倉持 裕		倉持 裕	2021. 11/11
	あーぶくたった、にいたった	別役 実		西沢栄治	2021. 12/07
	声 議論, 正論, 極論, 批判, 対話...の物語				
	Vol.1 アンチポデス	アニー・ベイカー	翻訳 小田島創志	小川絵梨子	2022. 4/14
2022/ 2023	Vol.2 ロビー・ヒーロー	ケネス・ロナーガン	翻訳 浦辺千鶴	桑原裕子	2022. 5/06
	Vol.3 貴婦人の来訪	フリードリヒ・デュレンマット	翻訳 小山ゆうな	五戸真理枝	2022. 6/01
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	字幕翻訳 石切正一郎	イヴォ・ヴァン・ホーヴェ	2022. 9/28
	レオポルトシュタット	トム・ストッパード	翻訳 広田敦郎	小川絵梨子	2022. 10/14
	未来につなぐもの				
	★Ⅰ 私の一ヶ月	須貝 英		稲葉賀恵	2022. 11/02
	★Ⅱ 夜明けの寄り鯨	横山拓也		大澤 遊	2022. 12/01
	フルオーデション 5				
	エンジェルス・イン・アメリカ	トニー・クシュナー	翻訳 小田島創志	上村聡史	2023. 4/18
	未来につなぐもの				
	★Ⅲ 楽園	山田佳奈		眞鍋卓嗣	2023. 6/08
	★モグラが三千あつまって	原作 武井 博 上演台本 長塚圭史	振付 近藤良平 音楽 阿部海太郎	長塚圭史	2023. 7/14

★＝新作

シーズン	演目	作	訳・脚色ほか	演出	公演初日
2023/ 2024	シェイクスピア、ダークコメディ交互上演				
	尺には尺を	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2023. 10/18
	終わりよければすべてよし	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鵜山 仁	2023. 10/19
	フルオーデション6				
	東京ローズ	台本・作詞 メリヒー・ユーン／カーラ・ボルドウィン 作曲 ウィリアム・パトリック・ハリソン	翻訳 小川絵梨子 訳詞 土器屋利行 音楽監督 深沢桂子／村井一帆	藤田俊太郎	2023. 12/07
2024/ 2025	★デカローグ 1～10	原作 クシシュトフ・キェシロフスキ ／クシシュトフ・ピエシェヴィチ 上演台本 須貝 英	翻訳 久山宏一	小川絵梨子 ／上村聡史	2024. 4/13
	ピローマン	マーティン・マクドナー	翻訳 小川絵梨子	小川絵梨子	2024. 10/08
	★ターバイ	原作 ソポクレス 構成・上演台本 船岩祐太		船岩祐太	2024. 11/07
	白衛軍 The White Guard	ミハイル・ブルガーコフ	翻訳 小田島創志	上村聡史	2024. 12/03
	こっこつプロジェクト Studio 公演				
	夜の道づれ	三好十郎		柳沼昭徳	2025. 4/15
	シリーズ「光景-ここから先へと-」				
	vol.1 母	カレル・チャペック	日本語字幕翻訳 広田敦郎	シュチェパーン・パーツル	2025. 5/28
	vol.2 ザ・ヒューマンズー人間たち	スティーヴン・キアラム	翻訳 広田敦郎	桑原裕子	2025. 6/12
	フルオーデション 7 vol.3 消えていくなら朝	蓬萊竜太		蓬萊竜太	2025. 7/10

★＝新作